

まちゼミ通信 特集号

作成：伏見歩き隊

まちゼミ通信特集号 2014年 3月発行

連絡先：t_hide314@yahoo.co.jp

目次

P1 目次

P2～ REPORT:まち歩き「深草を深く知る！」

P11～ REPORT:まち歩き「歴史のまち・伏見を感じる！」

P17～ 参照文献・引用資料

REPORT : まち歩き「深草を深く知る！」

はじめに
私たち「伏見歩き隊」は、平成24年3月10日(土)の午後から3時間あまり第1回イベントとして「深草を深く知る!~疏水架橋を巡り、軍道と伏見街道を歩く~」というまち歩きを行なった。今回は、主催者を含め28名の参加があった。多数の皆様が参加していただいたことに深く感謝している。

また、当日のまち歩きのナビゲーターとして、龍谷大学の岩田貢先生をお迎えした。岩田先生のご案内によって、より深い深草のまち歩きができたのではないかと考えている。

このたび、まち歩きのレポートを作成することにより、私たちの活動を振り返るとともに深草について私たちが知ったこと・学習したことをここに報告したいと思う。

(なお、20のポイントについてのレポートを前半の10のポイントについては、谷口が担当し、後半の10のポイントについては、居藤が担当した。)

- 龍谷大学 *スタート地点*
- 師団街道
- 第一軍道
- 砂川橋
- 一本松 (第一軍道・伏見街道交差点)
- 疏水 (鴨川運河)
- 師団橋
- 伏見街道沿いの町家
- 第二軍道
- 西浦中央公園 (旧深草練兵場跡)
- 深草西浦南公園
- 深草飯食町
- 水準点
- 中郷橋・第三軍道
- 直違橋
- 深草商店街
- 騎兵第二十連隊跡
- 十二帝陵 (深草北陵)
- 師団長宿舎跡地・旧偕行社建物
- 聖母女学院 (第十六師団司令部跡) *ゴール地点*

■龍谷大学

1639年（寛永16年）西本願寺が設立した「学寮」を起源とする。

1960年（昭和35年）深草学舎開設。深草学舎は、米軍の駐屯地を取得したもので、教室や事務室もそのまま米軍キャンプ施設が使用された。あまりの殺風景さに学生たちは、「草も生えていないのに深草とはこれはいかに」と嘆いたとか。

なお、深草学舎の場所は、現京都府警察学校の場所とともに戦前は、京都兵器支廠の場所であった。1997年（平成9年）深草学舎・21号館（正門すぐの建物）落成。

2009年（平成21年）創立**370**周年をむかえた。建学の精神は、「**真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする**」である。



スタート地点になった龍谷大学

■師団街道

この道は、京都の市街地と駐屯地を結ぶ道路として開かれたもので、軍用物資や兵隊などを運ぶ重要な道だった。

塩小路橋東詰を起点に南は、今の国道24号線に突きあたる伏見区撞木町東端辺りまで続きその先は、京町通につながる。

1908年（明治41年）竣工。終戦に国道24号に指定されたが、1971年（昭和46年）に国道24号は、竹田街道に移った。

スタート地点の龍谷大学東門から、師団街道をはさんで、東にすぐのところ砂川小学校の校門がある。その校門を南に100mほどいくと、そこは大きな交差点となっている。ここから東への坂道が、**第一軍道**である。軍道は、師団街道と伏見街道を結ぶ幹線道路であり、第一、第二、第三と3本ある。今回はスタート地点から100mほど、師団街道を南に下ったあと、第一軍道、第二軍道、そして第三軍道の順に軍道を歩くコースで、まち歩きを行なった。



師団街道を南下する

■ 第一軍道

この軍道は、東西200数十メートルの坂道で、相当以前から舗装されていたらしい。

京都兵器支廠（現、警察学校・龍谷大学）と深草練兵場の間を通る軍用道路であり、西の端は国道24号（旧竹田街道）で、東の端は伏見街道の交差点（一本松）である。西の端の国道24号の交差点から、東を望むと宝塔寺がはっきりと見え、まるでこの軍道は、宝塔寺への参道のようなのだ。

■ 砂川橋

砂川橋のことを語るまえに、まずは砂川という川について語るなければならない。地図上に砂川という川の名前の表示はないが、砂川小学校という名があることからわかるように砂川という川の名は存在している。今回のまち歩きにおいては、実際の砂川の存在を確かめることが、1つの目的であった。実際に砂川は、師団・第一軍道交差点から砂川橋に向かう途中、第一軍道の北側にあった。しかし、その川は、フェンスや草に覆われており、歩道を歩いていると、まったくその存在に気付かない。岩田先生のお話では、砂川はそこから地中にもぐり、第一軍道の地下から24号線をすぎ、スーパー「マツモト」の東側で姿をみせ、東高瀬川に注いでいるとのことだ。砂川の排水口も確認されたようだ。

砂川と疏水の関係であるが、当日私たちは砂川橋の北東部分の「落とし口」の見学を行なった。確かに、そこには、レンガ造りの暗渠口が確認された。レンガ造りのしっかりとした建築に“明治時代の遺構”を見た思いがした。ここは、砂川が疏水を潜って西に流れている（いた？）ことの唯一の“証（あかし）のポイント”だと思う。

砂川橋については、昭和3年3月の竣工である。現在の橋は、戦後に架け変えられたようだが、橋の東詰上手には、当初の大きな花崗岩の橋標が残され、「砂川橋」と刻されている。ここから、北をのぞくと京阪深草駅がよく見える。この駅の南西部分に7階建てのマンションがある。ここは、元は、京阪の車両整備工場と引込み線があったところだ。なお、京阪電車は、1910年（明治43年）天満橋から五条間が開通した。現深草駅（旧稻荷駅）も同年に開業した。また、東西二百数十メートルの第一軍道の頂上は、疏水砂川橋の西隣りにある京阪電車の跨線橋である。



川を確認しようとする参加者



■一本松（第一軍道・伏見街道交差点）

砂川橋を渡り、第一軍道を東に進むと伏見街道との交差点がある。ここは、「一本松」と言われている。その場所を示す石碑はあることはあるのだが、宝塔寺の名前の石碑の陰に隠れてほとんどわからない。残念である。

ここは、幕末に幕府方・大垣藩と長州藩との戦いが行なわれたところとして、歴史に名を刻んでいる。いわゆる、「一本松の戦い」があったところである。戦いが行なわれたのは、1864年（元治元年）7月19日で、長州藩兵別動隊500名と宝塔寺に陣取った大垣藩兵200名がここで激突したといわれている。大垣藩の第一陣は、敗れたが、第二陣は奮闘し、竹田方面より急遽参戦した幕府方諸藩の会津藩・桑名藩や新撰組の応援によって長州藩は撃退され、長州勢は伏見に後退したという。



第一軍道の東端 一本松

■疏水（鴨川運河）

この疏水は、1895年（明治28年）第2期工事において竣工となった。この疏水・水路は、「鴨川運河」と呼ばれている。この運河の北は、川端夷川の「鴨東運河」で、田邊橋のところで直角に曲がっている。鴨川運河は、川端御池で地中に潜り、塩小路橋の南で再び地上に姿を見せ、疏水として墨染まで続いている。墨染の24号線で再び地下に潜り、24号線の南で地上に姿を見せ、伏見の濠川に注いでいる。濠川と鴨川運河がつながることにより、明治・大正・昭和と伏見港で水揚げされた貨物が濠川そして疏水を通り、京都市内まで船で運ばれていた。



疏水治いを歩く

上流の第一軍道に架かっている砂川橋と第二軍道に架かっている師団橋の間には、北から綿森橋、町通橋、野田橋という狭いながらも人が通れる3本の橋がある。

二条（夷川）辺りから南下している疏水上の架橋がこれほど隣接している区間は他にない。この区間の疏水の西側には、かつて「深草練兵場」があり、この区間の疏水の東側にあった旧陸軍第16師団司令部との関係で、このように橋が多く架けられたのではないかと思う。

■ 師団橋

疏水ベリを砂川橋から南下すると、第二軍道にかかる橋すなわち師団橋に到着する。この橋はすぐ近くに師団司令部があったので、師団橋という名がついたらしい。

この橋で特に注目してほしいところが2つある。1つは、橋脚に入っている星マークである。五角の星マークがあるが、五芒星といい、陸軍のマークである。なお、師団橋の北に架かる橋の橋脚の星マークは六角の星マークであり、六芒星で籠目（かごめ）と呼ばれており、伊勢神宮の石灯籠にもこの籠目が刻まれている。これは魔よけといわれている。

そして、もう1つの注目すべきところは、師団橋の南東に立っている自然石に刻まれている文字である。よく

読むと「明治四一年（1908）三月竣工・工兵第十六大隊架設」と書かれている。しかしながら、石の一部が壊されており、文字を全て判読しづらい状態になっている。軍道の架橋工事は、全て伏見奉行所跡に駐屯していた「工兵第十六大隊」が工兵隊の演習のための教材として建設、架橋したといわれている。この自然石に刻まれた文字は、そのことを証明している貴重な“証人”だ。



疏水と師団橋

■ 伏見街道沿いの町家

このたびのまち歩きでは、途中で町家に立ち寄った。ちょうど私たちが訪ねた時は、内部の工事を行っていた。しかしながら、その日、大家さんは、私たちの訪問を温かく受け入れていただき、一部物件の説明もしていただいた。この物件は、敷地600平方メートル、建物母屋・離れ・蔵延べ250平方メートル、築100年、元は、呉服屋さんだったとのことだ。

平成25年5月22日に、龍谷大学深草町家キャンパスとして、開所式が行われ、オープンした。これから、大学と地域の連携事業の拠点としての活用、利用が期待される。



上：町屋内部 下：外観



■第二軍道

京都練兵隊の正門に面する道路であり、師団司令部（現、聖母女学院本館）に通じる道として、特に重要視された。現在は、藤森ダイエーの北出口に面する短い東西の道路である。

当時、**騎兵隊**（現聖母女学院と深草中学校の一带）と**歩兵部隊**（藤森神社東側一带）の場合、練兵場への往復は、この第二軍道又は第三軍道がルートとなっていた。この道は、疏水の橋（師団橋）と京阪電車を跨ぐ部分（西師団橋）を除き、終戦後しばらくまで、長期にわたり舗装されなかった。騎兵隊のルートだったので、騎馬のスリッリーな舗装は避けていたという理由からである。

■西浦中央公園（旧深草練兵場跡）

実は、西浦中央公園と書いているが、実際に公園に行くと、石柱に表記してある名称を見ると西浦中公園となっている。したがって、この公園の正式な名称は、西浦中公園である。今回のまち歩きでは、西浦中央公園でとおすこととしたい。

この地域は、古くから深草弥生遺跡で知られる稲作農耕の集落地であり、平安期は、「鶉（うずら）の里」と呼ばれた。

公園内にある「町略史」石碑（昭和56年建立）によると、明治41年京都練兵場（深草練兵場）となる。昭和24年農地に転用、西浦町と命名。昭和45年区画整理完了、住宅地となる。

練兵場のほぼ中央に老松が1本だけあり、「練兵場の一本松」といわれ、地理や演習の目標とされた。1913年（大正2年）民間機（カーチス機）が飛来したが、墜落し「日本初の民間航空機事故死発生」として、歴史に残っている。

この公園は、西浦町のほぼ中央にあり、春は桜、夏は、夏祭りなど、地域住民の憩いの場として利用されている。



西浦中央公演

■ 深草西浦南公園

名神高速道路を建てる際に共に作られた公園。高速道路の公園側が土で盛られているのは、緑化と防音効果のためと思われる。大型バスを止めたり課外授業の集合場所として使われたりする。



■ なかごう 中郷橋・第三軍道

現在は大岩街道（伏見・山科間を結ぶ）の一部。途中中郷橋がかかっている。軍道を東へ進むと京都医療センター（旧**国立病院**）があり、陸軍の病院として使われていた。

■ すじかいばし 直違橋

伏水第四橋。石造りの橋を支える下の部分が円形になって積まれている珍しいタイプの橋。直違の由来は、直線の川ではなく、橋が架けられているところで丁度、川が折れてしまっているから名づけられたと思われる。橋の上を通るだけでは気づかないが、下側を見るととてもオシャレで驚いた。



■ いじき 深草飯食町

深草で一番古いとされる集落。

「**飯食基**」が語源（新米の米飯を氏神の藤森神社に奉納する所）。飯食町という町名は日本でおそらくここにしかない。

■ 水準点(25.3m)

水準で標高が測量された点で、主要な道路に沿って約2キロごとに**花崗岩の標石**が埋められている。大岩街道と師団街道の交差点の南東にある。



■ 深草商店街

【軍人湯】今も営業を続けていらっしゃる。以前は「軍人湯」の名の銭湯は、深草によく見られた。

【はやしや】焼き芋やスイートポテトなどを売っているお店。

【ココキラリ】テレビでも紹介されるおいしいパン屋さん。



左：はやしやさん
右：ココキラリさん



どちらのお店もおいしかったです

■ 騎兵第二十連隊跡

深草中学校前にある石碑。深草中学校は騎兵第二十連隊の軍用地だった場所。学校周辺の住宅地一帯は騎兵隊や馬の宿舎が広がっていたと思われる。



■ 十二帝陵

ここは、後深草(89)・伏見(92)・後伏見(93)・後光厳(北朝 4)・後円融(同 5)・後小松(100)・称光(101)・後土御門(103)・後柏原(104)・後奈良(105)・正親町(106)・後陽成(107)の計 12 天皇(持明院統)と栄仁親王の納骨堂。静かな住宅街の中にひっそり佇んでいる。ただ、近くまで行くことは宮内庁によって禁じられていた。近くの JR 奈良線の路線が変更され、その為急カーブになってしまったというお話を聞いた。



■師団長官舎跡地・旧偕行社建物

師団長官舎の跡地には、「**師団長当番兵の宿舎**」と思われる平屋建ての木造建築が、2011年1月の下見時に存在していた。3月10日のまち歩き時には取り壊されていて、とても残念。取り壊される前には周りの生垣には**カラタチ**が植えられていた。鋭い棘があることから外敵の侵入を防ぐ目的だと思われる。

偕行社とは陸軍将校・将校生徒・陸軍文官などが親睦のために設立されたもの。現在は聖母学院や修道会の建物として活用されている。年季の入った門の柱は当時のまま。



赤い門の柱が当時のまま

■聖母女学院

第十六師団司令本部跡。イギリス人が設計した英国ピクトリア朝宮殿風。入り口は将校が馬でも出入りしやすいように高めに設計されている。

赤煉瓦の建物は、戦時中、建物が目立って爆弾を落とされないように、真っ黒に塗りつぶしたこともあるが、今は当時のまま復元されている。本館以外も歴史ある古い建物ばかり。この日は、聖母女学院に予め許可をもらったため敷地内に入ることができ、赤煉瓦をバックに最後に皆さんで記念撮影！



【あとがき】

如何だったでしょうか。深草という町は、地元民の私たちですら知らないマインナーな情報や歴史も多く、とても勉強になったまち歩きとなりました。岩田先生、参加して下さった皆様、ありがとうございました。

記：谷口・居藤

REPORT : 歴史のまち・伏見を感じる！

～城下町から宿場町へ～

はじめに

私たち「伏見歩き隊」は、第3回目のまち歩きを、平成24年10月7日(日)の13:00から17:30まで、「**歴史のまち・伏見を感じる！～城下町から宿場町へ～**」というテーマで、23名の参加者によって行った。当日は、御香宮神幸祭の神輿巡行日と重なったため、観月橋において神輿巡行を見学することができ、大変印象深いまち歩きになったのではないかと考えている。

神輿巡行見学後、参加者は、2つのコースに分かれて、ゴール(伏見区役所)をめざした。

このたび、2つのコースで訪れた主要なスポットを紹介したい。

まち歩きのコース

- 月見館 **スタート地点**
- 観月橋
- 御香宮神幸祭

A コース

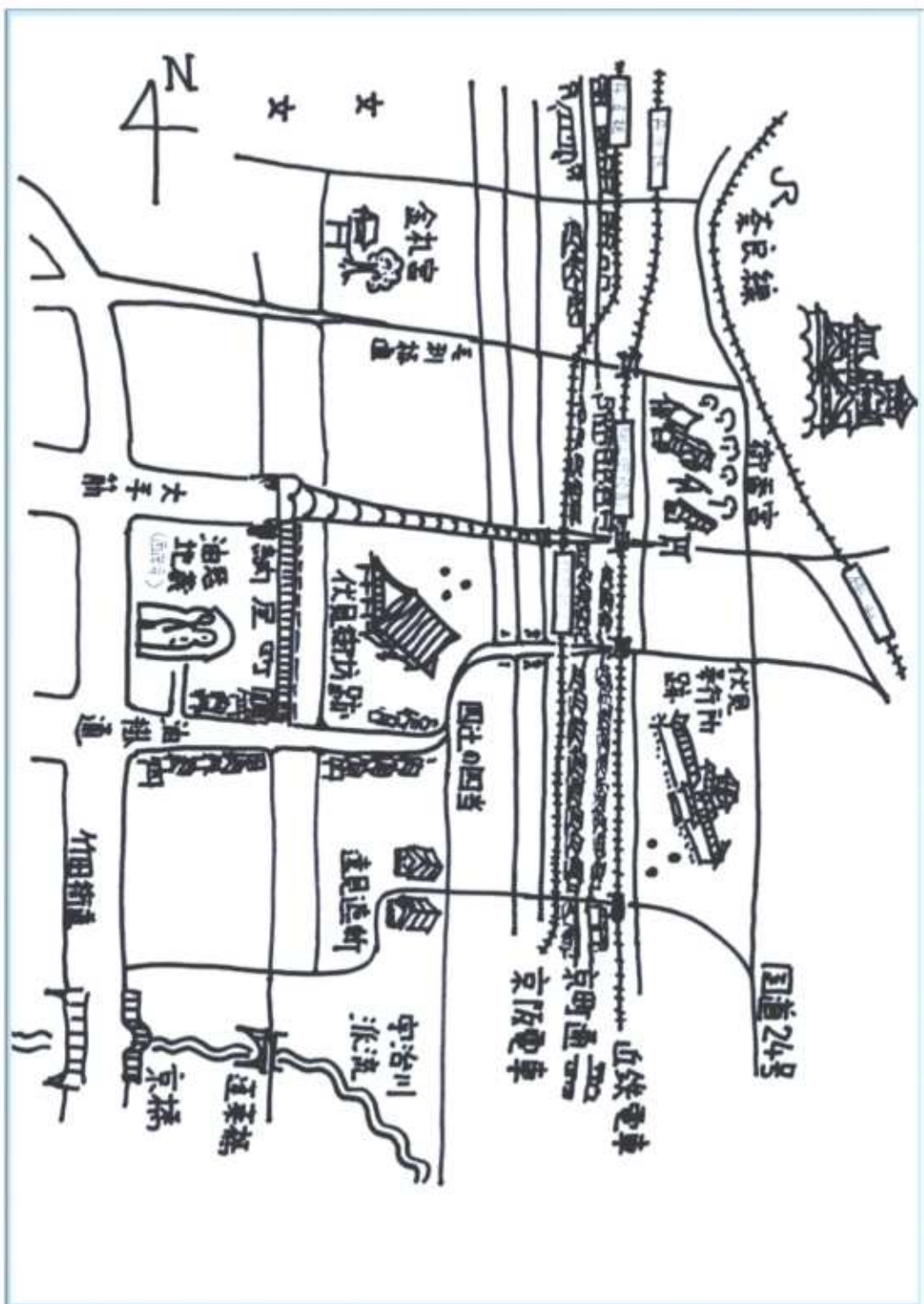
- 伏見奉行所
- 京町通
- 魚三楼
- 御香宮神社
- 伏見薩摩藩邸跡
- 丹波橋・濠川

B コース

- 弁天橋
- 遠見遮断・南浜
- 伏見御坊址
- 四ツ辻の四ツ当り
- 蓬莱橋

- 金札宮
- 伏見区役所 **ゴール地点**

※赤字については、紹介分を掲載しています。



■ 御香宮神幸祭

伏見の秋の風物詩、御香宮神社の神幸祭は同社が伏見全町の総氏神であることから「伏見祭」とも呼ばれ、10月上旬に開催される。祭礼のクライマックスは3基の神輿の巡幸。かつての伏見奉行が寄進した雌雄の獅子を先頭に、猿田彦、神輿、乗馬の宮司といった順で昔ながらの行列が続く。神輿の前日には花笠行列が、大手筋アーケードから神社の間を中心に繰り広げられる。花笠は各町内の厄除けをする神事。すでに室町時代に見られ、江戸時代には各地区で山鉦のような練り物を考案して出したという。

このようにバラエティに富む大規模な祭りであることから「洛南の大祭」とも称される。



■ 伏見奉行所

伏見奉行所は、1625年（寛永2年）別の場所からこの地に移された。現在の桃陵団地や桃陵中の敷地にあたる。約260年間、28人の幕府の奉行が、ここで伏見を治めた。1868年（慶応4年）の鳥羽伏見の戦いでは、奉行所に新撰組などの旧幕府軍が結集した。向かいの御香宮神社に陣取った新政府軍の砲火を浴び、奉行所は焼け落ちた。

明治以降、跡地は、陸軍工兵隊の兵営となり、戦後は進駐軍が接收した。返還後、団地が造られた。今、奉行所の名残は、石碑と一部の石垣だけである。



■京町通り（京町筋）

江戸時代には、伏見から深草・稲荷を経て、東福寺の門前を過ぎ、智積院・三十三間堂から五条大橋に達する街道である。この通りの途中、墨染あたりから大津通りへ抜けてゆく参勤交代の街道でもあった。

街並みは、総体に古く、“しもたや”と呼ばれる**べん**から**格子**の平入（ひらいり）の家屋が続いている。行く人からは家の中が見えないが、逆に家の中からは外の様子が密かに観察できる。こんなところに宿場町のなかに育まれてきた伏見の人の気質があった。すなわち自分を表に出さず、他人を観察するという冷やかさである。



■御香宮神社（ごこうのみやじんじゃ）

祭礼は、神功皇后、仲愛天皇、応神天皇ほか。862年（貞観4年）に当地に清泉が湧き出し、これを飲むとどんな病気も治るといふ奇跡が起こり、時の清和天皇より「御香宮」の名を賜ったという。

豊臣秀吉が、1592年～96年（文禄年間）に伏見城を築城する時に当社を大亀谷に移し、伏見城の鬼門の守護神としたが、1605年（慶長10年）には、徳川家康が旧地である現在地に移した。現存する多くの社殿は、徳川家によって寄進されたものである。本殿（重要文化財）は徳川家康の再建であり、また表門（重要文化財）は伏見城の遺構ともされ、見事な彫刻が桃山時代の雰囲気をも今に伝えている。

本年（2012年）は、清和天皇より「御香宮」の名を賜って、1150年の記念すべき年である。



■伏見御坊址

油掛通りの突き当たりの北側(現在の伏見幼稚園)に、かつて伏見御坊と呼ばれた東本願寺伏見別院があった。鳥羽伏見の戦いでは、会津藩が本陣を置いた。その戦災で損傷を受けた御堂は、1885年(明治18年)に建て替えられ、1990年(平成2年)老朽化のため、解体した。現在は、山門、鐘楼、大銀杏樹だけが残っている。



■四ツ辻の四ツ当り・遠見遮断(とおみしゃだん)

伏見奉行所を防衛するための街路が現在も残っている。油掛通りと、200メートル南の立石通りが東西に平行して走り、いずれも奉行所から300メートルほど西へ行ったあたりで竹中町通りと交わる。そこは街路がL字型、T字型に突き当たる遠見遮断の構造となっている。敵軍からは遠くまで見通せず、まっすぐ攻められないようにするためである。どこから来ても突き当たることから「四ツ辻の四ツ当り」とも呼ばれる



る鳥羽伏見の戦いでは、遠見遮断のあるこのあたりでも激しい市街戦が繰り広げられ、街路に沿った多くの家屋が戦災に遭った。

伏見奉行所跡から立石通りを西へ300メートルほど来たあたり、月桂冠本社を経て、大倉家本宅と月桂冠旧本社がL字型に配置されたこの界隈が遠見遮断である。ここから西は「南浜通り」と名を変え、寺田屋浜、京橋(濠川にかかる竹田街道の橋)に至る。

■油掛通り・西岸寺（さいがんじ）

油掛通りは、昔、大阪町が、今の大手筋商店街のような通りであったころ、その延長、京橋伏見港への道であり、商家が密集して活況を呈していた。江戸時代は、大手筋のもうひとつ南のこの通りが、メインストリートだったのである。

西岸寺は、油懸山（あぶらかけさん）地蔵院西岸寺と号する浄土宗の寺で、1590年（天正18年）雲海上人によって創建された。地蔵堂には、俗に油懸地蔵と呼ばれる石仏の地蔵尊を安置している。寺伝によれば、昔、山崎（乙訓郡）の油商人がこの地蔵尊に油を灌（そそ）いで供養し行商に出たところ、商売が大いに栄えたといわれ、以後この地蔵尊に油をかけて祈願すれば願いが叶うといわれ、人々からの信仰を集めている。境内には、「我衣（わがきぬ）にふしみの桃のしづくせよ 芭蕉」と自然石に刻まれた句碑がある。地蔵堂は明治維新の鳥羽伏見の戦いで類焼したため、1978年（昭和53年）に再建された。



油掛通り



西岸寺

■金札宮（きんさつぐう）

伏見で最も古い神社の1つで、天太玉命（あめのふとたまのみこと）を祀っている。室町時代につくられた「伏見九郷之図」においては、金札宮は、御香宮に匹敵する規模をもっていた社であることがわかる。また、その図においては、現在、御香宮の境内にある“白菊石”が、本殿の背後に描かれていることから、ある部分で御香宮と重なる信仰をもった社ではないかとも考えられている。

境内にはご神木で、京都市指定天然記念物の“クロガネモチ”の木がある。また、本殿の縁に座っている一対の狛犬が目にとまる。品が良く、のびやかなその狛犬が、往時の金札宮の盛大さを物語っているようである。





参照文献・引用資料

- 「京都・観光文化検定試験公式テキストブック」京都商工会議所編 淡交社
- 「京・伏見歴史の旅」山本眞嗣著 山川出版社
- 「月桂冠大倉記念館」HP 「伏見文庫」（伏見にまつわるコラムなど）
- 「京都観光Navi」HP 京都市産業観光局観光MICE推進室
- 「昭和十年代の京都・深草昔ばなし」三木敏正著 海文舎印刷株式会社

■編集後記■

この冊子は、伏見歩き隊が行った2回のまち歩きをもとに作ったものです。伏見歩き隊は、2011年11月に、「伏見の歴史と文化」をまち歩きやまちゼミを行うことによって、学んでいこうという趣旨で結成しました。伏見は、歴史の古いまちであり、まちのいたるところに歴史のあしあとが残っています。この冊子を発行することにより、伏見の魅力をお伝えし、伏見の歴史と文化の奥深さを皆さんと一緒に感じる事ができれば、これにまさる喜びはありません。（谷口英明）

私たちが行ってきたものを、このように1冊にまとめることができ嬉しく思います。記事を編集することに関して全くの初心者だったので、時間がかかってしまいましたが、多くの方がアドバイスや指摘を下さってようやく完成しました。ありがとうございました。（居藤智美）

